



Title	調査報告 岩倉使節団が観た演劇 : アメリカとイギリス
Author(s)	堤, 春恵
Citation	演劇学論叢. 2010, 11, p. 197-214
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97459
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

調査報告 岩倉使節団が観た演劇

—アメリカとイギリス—

堤 春恵

はじめに

明治政府の演劇政策には、幕末から維新にかけて欧米各国に派遣された使節団の観劇体験が影響を与えたと言われている。⁽¹⁾ 実際、使節団は各地で劇場に招待され、観劇記録のような旅行記を残したメンバーもいる。⁽²⁾ しかし演劇史研究の分野で、使節団が見た演劇についてのまとまった研究は、松本伸子氏による『明治前期演劇論史』⁽³⁾、三原文氏による「第一回遣米使節とアメリカの舞台」⁽⁴⁾以外は見当たらないのが現状である。

明治政府の演劇政策への影響を問題にするなら、最も重要な使節団の一つは明治四年から六年（一八七一年から七三年）にかけて、欧米ではアメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、イタリア、オーストリア、スイスの十二カ国を回覧した岩倉使節団を置いてあるまい。メンバーは特命全權大使岩倉具視（右大臣）、副使木戸孝允（参議）、大久保利通（大蔵卿）、伊藤博文（工部大輔）をはじめとする現役の明治政府のリーダー達である。一等書記官の一

人福地源一郎はのちの劇作家、福地桜痴である。彼等のうちの多くは「文明開化」が国家的スローガンであった時代に、政治のみならず、西洋文化の移入の面でも大きな影響力を発揮している。また使節団には正規のメンバーの他に四十数名の官費、私費留学生が同行した。そのある者はアメリカに残って勉強し、一部は使節団のアメリカ滞在中にヨーロッパに渡ったので全行程を共にしているわけではないが、彼等の中にも中江兆民、金子堅太郎、牧野伸顕、団琢磨、津田梅子等、新しい日本のリーダーが含まれている。

岩倉使節団のメンバーが実際に各地で劇場に招かれた事は、久米邦武による報告書『特命全權大使米欧回覧実記』⁽⁵⁾（以下『実記』と表記）と、木戸孝允による日記⁽⁶⁾という公私二つの資料によって明らかである。惜しむらくは久米、木戸の兩人共に観劇体験の詳細を記録していない。久米は観劇自体にさほど興味を抱かなかったようで、他のメンバーが劇場に招かれている間ホテルに籠って『実記』の草稿を作る事もあった。⁽⁷⁾『実記』においても、工場をはじめとする施設の見学や重要人物との会見などの使節

団の行動や、行く先々の国々の歴史や文化についての記録は詳細、具体的であるのに比べ、観劇に関しては「劇場ニ招カル」といったそつけない記述が散見されるだけである。『木戸孝允日記』の記述も『実記』とほとんど変わらない。やはり言葉や風俗の問題から劇の内容を詳しく記録するに至らなかったのだろう。その結果、岩倉使節団が観劇した芝居の題名や内容、観劇の状況は後世の読者には伝えられずに来た。

日本サイドでは書き残されなかった岩倉使節団の観劇体験はむしろ、欧米のメディアによって記録された。正規の団員だけでも四六名⁽⁸⁾、その上多くの随従者や留学生を引き連れ、大使節団は、海外各都市で注目の的だったのである。行く先々の町の新聞は使節団の日程を克明に報じ、記事の最後にはメンバーが訪れた劇場、劇の題名が記されているのが常であった。時としては劇評論に、客席における使節団メンバーの言動が描写されている事もある。場合によっては劇場の広告欄に、使節団の来場が告知されている事さえある。『実記』、『木戸孝允日記』に記録されている使節団のアメリカ、イギリスでの観劇記録は二一件であるが、当時の現地の新聞を調査した結果、そのうち一二件の劇場、劇の題名を明らかにする事が出来た。日時是不明であるものの、特定の劇の観劇をほめかす記事も存在する。フランス以降の行程の記録は未調査であるが、アメリカ、イギリスを合わせると滞在日数は使節団の全行程の約半分を占め、英語圏の調査の記録として一つのまとまりを持つと考えられる。

のでここに紹介する。

なお、日本では、明治五年二月二日（一八七二年二月三十一日）まで旧暦が用いられ、その翌日からグレゴリオ暦に改められて明治六年（一八七三年）一月一日となった。従って岩倉使節団のアメリカ、イギリス滞在中の日付は、日本側の記録と現地側の記録の間にずれが生じる。本稿は現地での観劇の記録であるのでグレゴリオ暦を用い、必要に応じて日本側の日付を括弧に入れて付記する。

アメリカ

——一八七二年一月一五日から六月二七日まで——

一八七一年十二月三日（明治四年十一月二日）に横浜を出港した使節団は一八七二年一月一五日にサンフランシスコに到着する。一行には、一時帰国するチャールズ・デロング（Charles DeLong）（二八三二〜七〇）駐日アメリカ公使夫妻が同行し、公使夫人が女子留学生の監督に当たっていた。デロングに雇われた通訳ネイサン・エモリー・ライス（Nathan Emory Rice）⁽⁹⁾も使節団に同行している。当時のアメリカでは、一八六一年から一八六五年まで続いた南北戦争の終結後、アブラハム・リンカーン大統領が暗殺され、アンドリュー・ジョンソンがあとを継いだ。だが、北軍を勝利に導いたユリシーズ・シンプソン・グラント

將軍（一八三二―八五）がジョンソンを一八六八年の選挙で破り、大統領の座についていた。日本使節団のサンフランシスコ訪問は一八六〇年（万延元年）の遣米使節について二度目である。岩倉使節団の訪問は現地の新聞にも報じられ、市民の好奇心をかき立てていた。一行の中でも特に、鬻を結った岩倉、着物姿の五人の開拓使派遣女子留學生が注目を浴びている。幕末から日本のサンフランシスコ名誉領事を務めていたチャールズ・オルコット・ブルックス（Charles Walcott Brooks）（一八三三―八五）は使節団を歓迎し、大使随行人としてヨーロッパまで使節団に随行する事になっていた。⁽¹⁰⁾ サンフランシスコでの使節団の観劇はかなりの程度、デロングとブルックスがイニシアティブを取っていたのではないかと思われる。

使節団の一行がはじめて劇場に招かれたのは一月一九日（明治四年二月一〇日）である。⁽¹¹⁾ 当時のサンフランシスコは人口約一七〇〇〇〇人。大きな劇場は四つあり、一八六九年に建てられたカリフォルニア・シアター（California Theatre）はそのうちで最も新しく、設備のよい劇場であった。『実記』には「米公使の誘引にて」⁽¹²⁾とあり、新聞にはアクターマネージャーとして主役も演じたジョン・マッカラー（John McCullough）（一八三三―八五）に招待された⁽¹³⁾とある。マッカラーはアイルランド生まれだがアメリカ東海岸で活躍し、カリフォルニアに来る前はエンドウイン・フォーレストの一座で重要な役を演じていた俳優で、悲劇的な英雄の役を得意としていた。一八六六年から一八七七

年までの間はカルフォルニア・シアターの支配人だった。⁽¹⁴⁾ 使節団のサンフランシスコ滞在を経済的に援助していたウィリアム・C・ラルストン（William C. Ralston）（一八二八―七五）は当時カリフォルニア銀行で頭取に次ぐ地位にあったが、⁽¹⁵⁾ 彼はこの劇場のパトロンでもあったという。⁽¹⁶⁾

ここで上演された芝居は『赤と黒』（Rouge et Noir）という題名であるが、残念な事に台本は発見出来なかった。幕開きは賭博場のシーンで、題名はそこから来ているらしい。新聞記事によれば、前半三幕は一八二九年のバリ、後半二幕はドイツの辺境が舞台となり、マッカラーが演じる主役モーリス・ダーベル（Maurice d'Arbo）が親友のふりをした悪漢によって罪に落とされるが、最後にヒロインのポーリーン（Pauline）と結ばれる波乱万丈のストーリーに、スリリングな賭博のシーン、殺人未遂、燃える小屋などの見せ場がはめ込まれた、スペクタクルたっぷりの芝居であったようだ。⁽¹⁷⁾

支配人マッカラーが使節団を招待したのは恐らく、日本人への興味が切符の売り上げに繋がると考えたからであろう。使節団の観劇が新聞に報道されたおかげで、使節団のメンバーは劇場に入るために二重三重に取り囲んだ見物人をかきわけねばならなかった。新聞によれば下手ボックスの下の段いくつかと、同じサイドの前から三列がメンバーのために用意されたのである。出席者の数はかなり多かったのだろう。岩倉は通訳ライス、公使デロングと共にボックス席に座を占め、隣のボックス

にはデロング夫人と二人の女子留学生、その隣には領事ブルックスが副使達と座っている。大使、副使等のボックスの後ろには日米の国旗が飾られていた。⁽¹⁸⁾使節団を見るための観客で劇場は大入りになったという。⁽¹⁹⁾

一月二八日(二月一九日)、⁽²⁰⁾木戸は通訳ライスの案内で観劇しているが詳細は不明である。

一月三十一日(二月二日)、使節団一行は一八六九年に開通したばかりの大陸横断鉄道でサンフランシスコを離れ、夕方サクラメントに着いた。サクラメントはカリフォルニア州の州都で、当時の人口は一八〇〇人ほどであった。その晩一行はメトロポリタン・シアター(Metropolitan Theatre)に案内された。新聞には、カリフォルニア州知事ブース(Boon)、米公使、その夫人、使節団メンバー(二人の女子留学生を含む)⁽²¹⁾がプロクター(Proctor)氏の招待により来場する事が記されている。⁽²²⁾この時上演されたのは『青銅の馬、ある王の魔法』(Bronze Horse or The Spell of the Cloud King)、『結婚した道楽者』(The Married Rake)、『ポンペイ最後の日』(The Last Days of Pompeii)である。⁽²³⁾『青銅の馬』はイギリスの劇作家でありオペラのリブレットも書いたエドワード・フィッツボール(Edward Fitzball)(一七九二―一八七三)によって書かれ、一八三五年にロンドンで初演された、中国を題材にした「オペラ風のスペクタクル」(operatic spectacle)である。⁽²⁴⁾『結婚した道楽者』は、チャールズ・セルビー(Charles Selby [George Henry Wilson])(一八〇二―一八六三)によるファルスで一八三五年

に初演された作品だと思われるが、脚本は未見である。『ポンペイ最後の日』はブルワー・リットン(Bulwer-Lytton)による同名の小説の舞台化で、一八四〇年代にニューヨークで初演された。⁽²⁵⁾メトロポリタン・シアターで上演されたのは火山の爆発と地震でポンペイの円形劇場が崩壊する最後のシーンである。

大陸横断鉄道で東を目指した使節団一行は大雪のため、二月四日から一八日間、ユタ州のソルトレーク・シティーで足止めを食う事になる。ソルトレーク・シティーは一八五〇年代にモルモン教徒によって拓かれた町で、当時の人口は一五〇〇〇人程であった。しかしこの辺境の町では演劇が盛んで、ロンドンのドルリー・レーン劇場をモデルに⁽²⁶⁾一八六二年に建設された堂々たる劇場が町の大通りに面してそびえ、デザート・ドラマティック・アソシエーション(Desert Dramatic Association)と呼ばれる常設劇団も組織されていた。この劇場を建てたのは当時まだ健在だったモルモン教の指導者ブリガム・ヤングその人であった。彼は大変な芝居好きで自ら舞台を踏んだ経験もあり、劇団の女優のうち三人は彼自身の娘だった。⁽²⁷⁾劇場の内部は機能的であるが飾りつけはシンプルで、上演はモルモン教徒とその家族のためのものであったようだ。⁽²⁸⁾

二月六日(二月二八日)、米公使デロング、夫人、領事ブルックス、二人の女子留学生を含む使節団のメンバー約四〇名はこの劇場に招かれ、チャールズ・ハップス・フォスター(Charles Hubbs Foster)(一八三三―九五)によって書かれ、一八七〇年に

ニューヨークで初演された『抜きつ抜かれつ』あるいは縛り首の縄』(Nack & Neck; or, The Hangman's Noose)を鑑賞した。⁽²⁹⁾この芝居の台本は発見されていないが、演劇新聞『クリッパー』(Clipper New York)の記事で粗筋を知ることが出来る。主人公のウォルター・ウィルマース(Walter Willmarth)は銀行の出納係でオーナーの娘キャリー(Carrie)と婚約しているが、一幕で殺人の容疑をかけられ、危うく縛り首になるところを友人によって救われる。第二幕では、キャリーに横恋慕するデンマン(Denman)が真犯人である事が電報によってウォルターに知らされ、デンマンは殺人の証人を乗っている汽車と消そうと企むがウォルターに阻まれる。第三幕でデンマンは絞首刑になり、ウォルターはキャリーと結ばれる。新聞の広告によれば、「絞首台での縛り首」のシーンと、「特急列車があわや木っ端微塵になる」シーンが呼び物であった。⁽³¹⁾

主役を演じたのはE・T・ステットソン(E. T. Stetson)、作者のフォスターと共に、ニューヨークのパワリー・シアターを本拠地とする俳優だった。『抜きつ抜かれつ』の一八七〇年の初演は大当たりし、スターになったステットソンはこの作品を演じながらアメリカ各地を巡る事になる。興味深い事に、岩倉使節団のサンフランシスコ滞在中ステットソンもサンフランシスコの劇場に出演していた。おそらく同じ時期に東を目指し、やはり大雪のためソルトレーク・シティーで足止めを食っていたものと思われる。

この日の公演は使節団歓迎のための特別公演で、劇場は日米両国の国旗で飾られていた。⁽³²⁾劇場の内部の様子を久米は「揚屋ノ設ケ頗ル広大ナリ、日本ヨリ輸入ノ挑灯(チョウチン)ヲ挑(カカ)ケテ享応ヲ示ス」と書きとめている。⁽³³⁾

二月一日(明治五年一月二日)使節団一行は再び劇場に赴く。⁽³⁴⁾この日上演された『ピサロ』(Pizarro)はドイツ人の劇作家アウグスト・フリードリッヒ・フェルディナンド・フォン・コツェブー(August Friedrich Ferdinand von Kotzebue)(一七六一―一八一九)によって書かれ、リチャード・ブリンズリー・シェリダン(Richard Brinsley Sheridan)(一七五二―一八一六)によってイギリスの舞台の為に翻案され、一七九九年に初演された作品である。一六世紀ペルーの戦士ローラ(Rola)が、子供をかかえて橋を渡り、ピサロが率いるスペインの軍隊から逃れるシーンが作中の見せ場である。⁽³⁶⁾主役ローラを演じたのは『抜きつ抜かれつ』と同じステットソンであった。⁽³⁷⁾ブリガム・ヤングはかつてイリノイにいた頃、この役を舞台で演じた事がある。⁽³⁸⁾ステットソンは恐らくこの事を知っていて、ヤングを喜ばせようとしたのではないだろうか。

二月二日、使節団は再び汽車に乗り込んで東に向う。途中シカゴに一泊するが、シカゴは一八七一年一〇月の大火の被害から回復していなかった為、観劇どころではなかったようだ。一行は二月二九日にワシントンに着く。

一八七二年のワシントンでは、ホワイット・ハウスに程近く位置す

るナショナル・シアター(National Theatre)⁽³⁶⁾が、首都を訪れる内外のスターや、ニューヨークのプロダクションの引越し公演に舞台を提供していた。一八三五年に建てられたこの劇場はその後何度も焼けては建て直されているが、使節団の訪問時の建物は一八五七年に再建されたものである⁽⁴⁶⁾。一九世紀前半を通じてナショナル・シアターのライバルであったフォード・シアター(Ford's Theatre)は、一八六五年リンカーン大統領暗殺の舞台になったあと閉場し、一八七一年には博物館として使われていた。

一八七二年三月四日、岩倉具視大使、大久保利通副使、伊藤博文副使等はホワイト・ハウスにグラント大統領を訪問して国書を奉呈する。七十名の「東洋の客人」が超満員のナショナル・シアターの平土間の最前列(front orchestra chais)に陣取り、パレ・ローザ・イングリッシ・オペラ・カンパニー(Parepa-Rosa English Opera Company)によるオペラ『ボヘミアの少女』(*The Bohemian Girl*)⁽⁴⁷⁾を鑑賞したのはその二日後、三月六日(二月二七日)の事だった。『実記』には「場中ニ我国及ビ米ノ国旗ヲ交叉シテ飾ル、別段ノ亭応ナリ」とある⁽⁴⁸⁾。新聞にはオペラの宣伝と共に、使節団の劇場への来訪が予告されている。『ボヘミアの少女』はイギリスの作曲家マイケル・ウイリアム・バルフ(Michael William Balfe)(一八〇八―七〇)の作品で、アメリカでは一八四四年にニューヨークで初演された。ジプシーのもとで育てられたアーリーン(Arlene)はポーランドの貴族タデウス(Thaddeus)と恋に落ち、自らもタデウスを愛するジプシーの女

王に陥れられようとするが、ジプシーの女王は死に、アーリーンの尊い生まれが現れてタデウスと結ばれるという筋である⁽⁴⁵⁾。ドイツ生まれの指揮者、興行師カール・ローザ(Carl Rosa)(一八四二―八九)に率いられるパレ・ローザ・イングリッシ・オペラ・カンパニーは一九世紀後半のアメリカとイギリスでも影響力の強かったグループの一つである⁽⁴⁶⁾。この日はカールの妻でスコットランド生まれのソプラノ、ユーフロジニー・パレ・ローザ(Euphrosyne Parepa-Rosa)(一八三六―七四)が主役のアーリーンを歌った。

三月一日に条約改正に関する第一回目の日米会談が行われ、そののち一三日、一六日、一八日と会談が繰り返される。その過程で、使節団が持参した国書に全権委任の文面がない事が指摘され、副使大久保と伊藤は急遽帰国して必要な国書を持参する事になった。二人が日本から戻る七月二二日までの四ヶ月間、使節団はアメリカ東部に滞在し、観劇の機会に恵まれる事になる。

三月二七日(二月一九日)、使節団は同じくナショナル・シアターでオペラ『ミニオン』(*Mignon*)⁽⁴⁹⁾を観ている。この日は、スウェーデン出身の国際的なソプラノ、クリステイーネ・ニルソン(Christine Nilsson)(一八四三―九二)のアメリカツアーのワシントン初日であった。ジョージ・バーナード・ショアによってこの時代の最も才能あるソプラノと評されたニルソンは⁽⁴⁸⁾、ヨーロッパのみならずアメリカでも活躍した。ワシントンツアーの演目にはシャルル・

グノー (Charles Gounod) (一八二一―一八九三) のオペラ『ファウスト』(Faust) が含まれているが、ヒロインのマルゲリート (Marguerite) はニルソンの当たり役の一つで、一八六九年のパリにおける初演時にも、一八八三年のニューヨークのメトロポリタン・オペラハウスのオーブニングでもこの役を歌った。ワシントン初日の演目は『ランメルモールのルチア』(Lucia di Lammermoor) と発表されていたが、出演者の都合で直前にアンブロワーズ・トマ (Ambroise Thomas) (一八一七―一八九六) 作曲の『ミニョン』(Mignon) と差し替えられた。⁽⁴⁹⁾ アリア「君よ知るや南の国」で知られるこのオペラは、一八六六年にパリで初演された。ゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の前半、学生ヴィルヘルム (Wilhelm)、女優フィリーヌ (Philine)、清純なジブシー娘ミニョン (Mignon) の恋の三角関係をオペラ化したものである。舞台は一八世紀ドイツとイタリア。ドイツの田舎町で、旅芸人の一座の娘ミニョンは自分を一座から引き取ってくれた学生、実はウィーンの貴族の息子ヴィルヘルムに思いを寄せる。ヴィルヘルムは女優フィリーヌを愛していたが、一行が滞在する貴族の邸宅で火事が起こり、ヴィルヘルムは邸内に取り残されたミニョンを救い出す。イタリアで二人が身を寄せた城の主ロタリオ (Rothario) の行方不明の娘がミニョンであることがわかり、ヴィルヘルムとミニョンは結ばれる。⁽⁵⁰⁾

ニルソンが国際的な大オペラ歌手である事は観劇した使節団メンバーにも伝えられたらしい。木戸孝允は日記に、「子ルソ

ンなるもの当時世界一二の有名なる名調にて今夜も此場中にあり曾て彼華盛頓府に来て場を開く百日間にして一日毎に千金を得ると云ふ」と書き付けている。⁽⁵¹⁾ しかしながら多くの使節団メンバーにとつては、長大なオペラを言葉もわからぬまま鑑賞するのは重荷だったようだ。その様子をワシントンの新聞『イブニング・スター』(Evening Star Washington) のレポーターは次のように描写している。

オペラの上演中、ニルソンはただ一度の例外を除いては、観客が存在していることを全く意識してないようであった。その例外とは、彼女の歌声が日本から来た使節達の野蛮な心を癒し、眠らせてしまった時である。この光景は、注意深い芸術家の目を逃れるにはあまりにも可笑しかったのであろう。ニルソンが明らかに面白がっている様子がわかった。⁽⁵²⁾

岩倉使節団のメンバーはワシントンでオペラを二回鑑賞しているが、その事実は『実記』の記録からも、『木戸孝允日記』の記述からも浮かび上って来ない。久米の観劇記録は「劇場ニ招カル」、木戸の場合は「戯場に至る」と書かれるのが普通であり、ジャンルにまでは言及されていないからである。『実記』の中で「オペラ」というジャンルを意識した表現が出て来るのはフランスに渡ってから一八七三年一月一日の記事で、「オペ

「ラ」堂ヲ以ッテ議院トナシタリ」とあるのが始めてである。⁽⁵³⁾又同年三月一日ベルリンでの記事には、「夜、皇帝ノ劇場ニ赴ク(是ヲ「オペラ」ト云、諸種ノ芝居中ニテ最上等ナルモノ猶我猿樂ノ如シ)。」とある。⁽⁵⁴⁾久米邦武は明治の能楽復興運動に尽力した一人として知られ、岩倉使節団の一員としてのオペラ体験との関係について論じた論考もあるが、使節団とオペラとの出会いが『実記』の記述からのみではうかがい知れない事を指摘しておきたい。

『実記』四月六日(二月二十九日)の項には「夜「ヘールト」の演劇に赴ク」とある。⁽⁵⁶⁾しかし当時のワシントンには「ヘールト」という名前の劇場は見当たらず、演劇の名称としても「ヘールト」が何を意味するかは定かではない。『木戸日記』の同じ日には、午後、林董等数人のメンバーと共に「曲馬に至り」「異獣異鳥」と、おそらく奇形と思われる人間を見、夜は「モローの案内にて劇場に至る」とある。⁽⁵⁷⁾木戸達が午後を訪れたのは六番街の空地で興行していた『アダム・フォーパーの巨大な見世物、博物館、キャラバン、鳥小屋』(Adam Forepaugh's Gigantic Menagerie, Museum, Caravan, Aviary)であつたようだ。⁽⁵⁸⁾このサーカスはマネージャーのアダム・フォーパー(Adam Forepaugh)(一八三二〜九〇)の名を冠していくつかの名で呼ばれているが、一八六七年に創設され、当時のアメリカでは三本の指に入るサーカス団だった。⁽⁵⁹⁾

一方夜の観劇には大使を始め十数名が同行している。この日は土曜日で、ナショナルシアターはマチネーのみの公演であつ

たと思われるので、『実記』に記された「ヘールト」の演劇も、木戸、岩倉が赴いた劇場もナショナル・シアターではあり得ず、観劇の内容は不明である。

『木戸日記』の四月二十九日(三月三日)に「大使始フルックス之案内にて劇場に至る」とあるが、『実記』には観劇の記述はない。木戸とブルックスの行き先がもしナショナル・シアターであれば、彼らが観劇したのはこの日初日を開けたマドモワゼル・マリー・エーメ・オペラ・ブッフアの女王(Mlle MARIE AIMEE "The Queen of Opera Bouffe")主演の、ジャック・オッフエンバック(Jacques Offenbach)(一八一九〜八〇)作曲による『ジェロルスタン女大公殿下』(La Grande-Duchesse de Gerolstein)であるようだ。⁽⁶²⁾

『実記』には五月六日(四月一日)、「夜劇ラミル」とある。⁽⁶³⁾『木戸孝允日記』五月十日(四月五日)には「夜ブルックス之案内にて劇場に至る」とある。⁽⁶⁴⁾ワシントンにおいて使節団員が訪れた劇場は、ナショナル・シアターが圧倒的に多い事を考えると、久米と木戸は五月六日に初日を開けた『ブラック・クルック』(Black Crook)⁽⁶⁵⁾を観に行つた可能性が大きい。また日時は不明だが、大使岩倉も『ブラック・クルック』を観劇していると思われる。チャールズ・M・バラス(Charles M. Barras)(一八二二〜七三)によって書かれ、一八六六年にニューヨークで初演されたこの劇はブロードウェイで一年以上のロングランを達成した最初の作品として知られる。⁽⁶⁶⁾豪華な舞台装置、豊富な歌と踊り

に彩られた舞台は、ミュージカルの元祖とも言われている。シノプシスは以下の通りである。

舞台は一六〇〇年のドイツの山の中である。ブラック・クルツクと呼ばれる魔術師ハーツォグ (Hertzog) は寿命を延ばすために悪魔と契約を結び、毎年一人の人間の魂を悪魔に差し出そうとしている。画家のロードルフ (Rudolf) は恋人のアミーナ (Amina) を恋敵の伯爵ウォルフエンスタイン (Wolfenstein) に奪われ、自分は伯爵の城の地下牢に閉じ込められていた。ハーツォグはロードルフの魂を奪うため、彼を牢から救い出して黄金の洞窟に送り届けると申し出、ロードルフはアミーナを救うためにハーツォグの誘いに乗る。ロードルフが旅の途中で命を助けた鳩は、実は黄金の洞窟に住む妖精の女王スタラクタ (Stakta) だった。スタラクタと妖精達の助けを借りてロードルフは伯爵を倒してアミーナと結ばれる。悪魔との約束を果たせなかったハーツォグは滅びる。

女王が住む黄金の洞窟が一瞬のうちに妖精の世界へと変わるシーン、この場に登場する、ピンクのタイツを穿いた百人のバレリーナはこの作品の呼び物の一つであった。『日本外交文書』にまとめられた使節団関係の記録によれば、五月一日、使節団のメンバーはケイトと名乗る女優から観劇に招待される⁽⁶⁷⁾。前後の事情から考えて、このケイトは『ブラック・クルツク』で女王スタラクタに扮していたケイト・サントリー (Kate Santley) (一八三七―一九二三) であったと思われる。彼女はアメリカ生ま

れであるがイギリスでデビューし、一八七〇年代にはアメリカに戻ってブロードウェイで活躍していた。この女優が何故使節団メンバーを彼女の出演する『ブラック・クルツク』の公演に招いたかは、五月二七日になってワシントンの新聞『デ일리・モーニング・クロニクル』(Daily Morning Chronicle [Washington]) に現れた記事から推察されよう。

ワシントンを離れる直前、ミス・ケイト・サントリーは、岩倉に請われて彼にお目通りした。通訳を介して岩倉は、彼女に会えて大変嬉しく、「彼女の事は、輝く瞳の女王としてこれからも長く記憶するでしょう」と述べた。その後彼は彼女に、日本の扇子や品物、ハンカチを入れる箱、水晶それに宝石類と言った美しく高価な贈り物をした。事実、大使の振る舞いは恋に落ちた紳士のそれであった⁽⁶⁸⁾。

六月五日(四月三〇日)、木戸を含む使節団メンバーは、ナショナル・シアターで日本人の軽業を観る事になる⁽⁶⁹⁾。日本人の軽業師のグループは、明治維新の直前から次々と海外に進出し、欧米各地にその足跡を残している⁽⁷⁰⁾。この時ワシントンで公演を行っていたのはロイヤル・エド・ジャップス (Royal Yeddo Japs) と名乗る一座であった。一座のリーダー、「Professor Gangero」は、一八七一年、一三人の座員と共に日本を離れた早川源次郎である⁽⁷¹⁾。源次郎の演技は伝統的な軽業芸、肩の上に竹竿を立て、

竹竿の上で少年が芸を演じる間三味線を弾きながらバランスを取る曲芸であったようだ。⁽⁷²⁾「Sunkechi」と呼ばれる芸人は、何本かの刀を刃を上にして並べた梯子の上を裸足で歩いてみせた。一座には「Belle of Japan」と呼ばれる綱渡り芸人もいた。⁽⁷³⁾使節団が観劇した日のこの芸人の演技を、『モーニング・クロニクル』(Morning Chronicle [Washington])の記者は次のように予告している。

——今日の午後のマチネーで、「Bell of Japan」は二階棧敷(gallery)から舞台へと張った一本のロープの上を、ロープの支え綱もなく、バランスを取るための棒も持たずに歩くだろう。⁽⁷⁴⁾

なお、『木戸日記』によれば使節団の観劇はマチネーではなく、夜の公演だった。⁽⁷⁵⁾

ワシントンにおける日本の軽業の一座との出会いを、久米は次のように回想している。「此の比軽業の一組華府に来て其の一人が女装した儘大道を歩行するに行き逢つたが、市民は「娘さん」というて、我等と「一視同仁」にしたのには閉口した。(中略) ついで大劇場に請待され、日本軽業を見たが、平凡の綱渡芸で、彼の「娘さん」が白粉を塗り立て、毛脚に総模様の裾を曳いて芸を演じたのには一行の手に汗を握らせた。⁽⁷⁶⁾ マリー・メイ (Marlene Mayo) 氏「The Western Education of Kume

Kunitake, 1871-6」の中で、このエピソードについて、軽業師が日本の浴衣を着て大通りを歩いたので女性と間違えられ、同じ日本人の使節団員も「娘さん」と呼びかけられたと解釈している。⁽⁷⁷⁾ しかし児玉実英によれば、一九世紀の日本の軽業では、男性が女装して綱渡りをする芸が見られた。⁽⁷⁸⁾ 「Bell of Japan」も女装した綱渡り芸人であり、おそらく宣伝のために舞台衣装を着けてワシントンの目抜き通りをパレードしたのではないか。「Bell of Japan」を日本語で「娘さん」と称したので、ワシントン市民は同じ日本人の使節団メンバーにもそう呼びかけたのだろう。⁽⁷⁹⁾

六月九日、大使一行はアメリカ政府の招待で北部巡遊に出発する。翌一〇日(五月五日) ニューヨークに到着し、その夜八時より、「プロトウエー」ノ劇場⁽⁸⁰⁾に招かれている。木戸の日記によれば、彼等が観劇したのは一種のアクロバットであったようだ。木戸は「八字より又戯場に至る一人銅線を渡るを見る其芸実に妙彼曾てナヒガラ瀧上へ銅線を張り其上を渡りしと云依て其節の新聞に世界第一の名を得んと生国は仏なりと云」と書き残している。⁽⁸¹⁾ ニューヨークでの観劇の内容については「実記」でも言及されている。使節団は六月一四日にナイアガラ滝を見学した。久米はその時の記録の中で「——往年欧州ノ軽業師拿破倫(ナポレオン)トカ呼ル、大胆無敵ノ術ニ得タルモノ、此峽ニ綱渡リヲナセシコトアリ、其軽業師ハ、今モ現在シ、後新約克府(ニューヨーク)ニテ綱渡ヲナシタルヲミタリ」と書い

ている⁽⁸²⁾。フランス人の軽業師ブロンディン(Bondin)は一八五九年にナイアガラ滝の上に張り渡したロープを渡って評判を呼び、その後ヨーロッパ、アメリカで綱渡りの曲芸を演じた。木戸と久米の記述はどちらも、使節団のメンバーがニューヨークの劇場でブロンディンの綱渡りを観た事を示唆している。しかしながら一八七二年六月一〇日にブロンディンがニューヨークの劇場に出演したという記録は見当たらず、使節団のメンバーが訪れた劇場の名前も定かではない。

六月一日にニューヨークを発った使節団のメンバーは、ウエスト・ポイント、ナイアガラ、サラトガ・スプリングスに立ち寄り、六月一七日にボストンに到着する。翌一八日(五月三日)と一九日(二四日)、南北戦争終結十周年記念音楽祭に出席した。『実記』の中でこの音楽祭の記録は、舞台芸術についての唯一のまとまった記述であるが、音楽史の分野で詳しい論考がなされているのでそれに譲りたい⁽⁸³⁾。

一八日の夜一行はグローブ・シアター(Globe Theatre)でジョージ・L・フォックス(George L. Fox)(一八二五～七七)によるパントマイム、『ハンプティ・ダンプティ』(Humpty Dumpty)を観劇している⁽⁸⁴⁾。このパントマイムはフォックスによって一八六八年に創められた。三原文氏によれば、「英国の伝統劇パントマイムと、イタリア起源のコメディ・ア・デッラルテ(がフランスに渡ったあとのもの)を融合させた独自の道化喜劇的なスタイル」である。フォックスが演じたハンプティ・ダンプティ

は台詞や歌を排除し、「卵のような白塗りの禿げ頭で派手な衣装に身を包み、ひたすら表情と仕草で勝負するという変幻自在な役柄」であった⁽⁸⁵⁾。ボストンでも、フォックスの演技や、衣裳や舞台の華やかさが新聞の劇評で賞賛され、客席の反応も上々だったようだ。

使節団は六月二〇日にボストンを離れ、ワシントンへ向う。七月二二日に大久保、伊藤副使が帰着し、ただちに条約改正の会談を行うが決裂し、使節団はアメリカを離れ、ヨーロッパに向う決断を下した。その後ニューヨークを経て再びボストンに至り、八月六日にボストンの港からイギリスに向うまで、使節団メンバーの観劇の記録は見当たらない。

イギリス

——一八七二年八月一七日から二月一六日まで——

使節団は八月一七日、リヴァプール経由でロンドンに入る。政府によって任命された接待掛ジョージ・ガードナー・アレクサンダー(George Gardner Alexander)(一八二一～九七)、帰英中のイギリス駐日公使ハリー・スミス・パークス(Harry Smith Parks)(一八二八～八五)、公使書記官(通訳)ウイリアム・ジョージ・アストン(William George Aston)(一八四一～九二)が使節団を案内した。九月一六日(八月一四日)、木戸は当時イギリス

に留学していた甥で養子の正二郎⁽⁸⁶⁾と共に芝居を観ているが、詳細はわからない。⁽⁸⁷⁾この時期、ヴィクトリア女王はスコットランドに避暑に赴いていた。女王の還幸を待つ間、一行のうち岩倉木戸、大久保、伊藤等は、九月二十九日ロンドンを発ち、アレクサンダー、パークス、アストンに案内されてイギリス北部へと向った。

一行が最初に訪問したりヴァプールは北西部の大都市の一つで、世界に開かれた港町である。使節団が訪れた頃には、ロンドンに次いでイギリス第二の都市と言われていた。一行は一月一日(八月二十九日)に、アレクサンドラ・シアター (Alexandra Theatre) で『コリンthusのメデア』(Medea in Corinth)を観劇した。この作品はイギリスの劇作家W・G・ウィルズ (W. G. Wills) (一八二八〜九二) による悲劇で、脚本は未見であるが、新聞の劇評によればギリシャ神話のイアソンとメデアの物語を基にした劇であり、メデアに扮した主演女優ミス・ペイトマン (Miss Bateman) の演技が高く評価されている。⁽⁸⁸⁾この観劇は市長に案内された公式な訪問であり、劇場の財務担当者 (treasurer) が使節団を入口で迎え、ドレスサークルの一列目に案内した。付属オーケストラが(日本の)国歌を演奏して使節団を熱烈に歓迎したという。⁽⁸⁹⁾終演後、一行は舞台裏を見学した。⁽⁹⁰⁾

一〇月二日(八月三〇日)には「馬芝居」⁽⁹¹⁾、木戸によれば「馬戯場」⁽⁹²⁾に行っている。この時も市長の案内によるものだった。サーカスだと思われるが詳細は不明である。

一〇月四日(九月二日)一行はマンチェスターに移動した。マンチェスターは毛織物工業で盛え、リヴァプールと共に北西部の大都市の一つである。この日木戸孝允と何人かのメンバーは、市長に案内され、シアター・ロイヤル (Theatre Royal) と、ミス・ロバートソンとヘイマーケット・カンパニー (Miss Robertson and the Haymarket Company) による『恋の追跡』(The Love Chase)⁽⁹³⁾を観劇している。⁽⁹⁴⁾シアター・ロイヤルは一八〇七年に開場した歴史ある劇場であるが、一八四四年に焼けて建て直されている。『恋の追跡』は、三組の男女の恋が入り乱れ、終幕で思い違いや隠されていたアイデンティティがすべて現れて三組の結婚式に至る喜劇である。ジェイムズ・シェリダン・ノウルズ (James Sheridan Knowles) (一七八四〜一八六二) によって書かれ、一八三七年に初演された。⁽⁹⁵⁾久米が一人ホテルに残ったという回想録の記事はこの時の事であろう。⁽⁹⁷⁾

同じくマンチェスターで、一〇月七日、使節団はプリンス・シアター (Prince's Theatre) における『ヘンリー五世』(Henry V) の上演に招かれる。『実記』には「使節ノ為メ、別段の演劇ニテ、赤白ノ絹ニ、番附ヲ印刷シテ、一統ニ配布シ、場内ニ兩國ノ国旗ヲ交叉シ、其設ケ甚タ盛ナリ」とある。⁽⁹⁸⁾一八六二年に建てられたプリンス・シアターは、豪華に飾られたプロセニウム・アーチ、平土間を馬蹄形に取り巻く二層のボックス席を備え、一八五八年に建てられたコヴェント・ガーデン劇場の内部によく似た典型的なヴィクトリア朝風の豪華な劇場だった。⁽¹⁰⁰⁾「ヘン

リー五世』は劇場のマネージャーでもあった俳優チャールズ・カルバート (Charles Calvert) (一八二八～七九) の主演だった。

マンチェスターにおけるカルバートのシェイクスピア上演は一八五九年、シアター・ロイヤルでの『ハムレット』に始まる。一八六四年にカルバートがプリンス・シアターのマネージャーとなると同劇場で毎年のようにシェイクスピアを上演するようになり、『ヘンリー五世』はその九番目の演目である。このプロダクションは一八七五年にニューヨークのブース・シアター (Booth's Theatre) に引越し公演をしているが、カルバートは健康を損ねていたため、主役ヘンリー五世を演じる事は出来なかった。

マイケル・ブース (Michael Booth) によれば、カルバートによるシェイクスピア上演は、ロンドンの演劇と比較しても高い水準に達し、ヴィクトリア朝中期 (一八五〇年代から七〇年代) の地方都市における質の良いプロダクションの好例と言えるものであった。カルバートの『ヘンリー五世』はチャールズ・キーン (Charles Keen) (一八一七～六八) に倣って歴史的に正確な舞台装置や衣装を用いた。それだけではなく、これもキーンに倣い、シェイクスピアの原作では五幕のはじめにコーラスによる五行の台詞で描写されているだけの、アジンコートの戦いでフランスに勝利したヘンリー五世がロンドンに入場するシーンを「歴史的エピソード」と称して舞台で再現した。よろいを輝かせ、軍旗をはためかせて行進するイギリス軍を率い、馬に跨ってい

よいよロンドン橋のもとに差し掛かったヘンリー五世を、ロンドン市民、職人、若者、娘達等が道を埋め尽くして迎えるこのシーンは、カルバートの友人で、このプロダクションの時代考証を担当したアルフレッド・ダービーシャ (Alfred Darbyshire) によれば二〇〇人から三〇〇人の人間を舞台に乗せる大掛かりなものであったという。彼は「あの場面を実際見た者はそれを忘れることはないだろう。」と書き残している。

使節団の一員林董は、後にマンチェスターでの観劇の様子を「同使節マンチェスター市に滞在の一夜、市長は歓待のために使節を芝居に招いた。連中が多勢であったから、東西の棧敷を取って二組に分つて、東の一組には市長の夫人と令嬢とが亭主役となり、西の一組には市長と書記官が亭主役となつたが(後略)」と回想している。劇そのものについての記述がないのが残念だが、『恋の追跡』もしくは『ヘンリー五世』の観劇の折の観客席の有様が伺える。

一〇月九日、使節団はマンチェスターからグラスゴーに向つた。一行は一〇月一二日にエディンバラを基点にスコットランドを巡り、その後ニューカッスル、ブラッドフォード、シェフィールド、バーミンガムなどを巡り、十一月一日に再びロンドンに帰りつく。ヴィクトリア女王への謁見は二月五日である。一行がフランスに向けてイギリスを離れたのは二月一六日だった。マンチェスター以後使節団の観劇の記録は見出せない。

おわりに

岩倉使節団は、一九世紀の新しい交通手段である蒸気船と蒸気機関車を駆使して世界を巡った。それと同じ時期に、やはり汽船や汽車に乗って世界を駆け巡っている人々がいた。俳優達である。その中にはスベクタクルを売り物にした大衆演劇のスターも、国際的なオペラ歌手も、日本の軽業の芸人も、世界最初のミュージカル女優も、独創的なパントマイムで一時代を画した道化師も含まれている。使節団の行程と、俳優達の巡る道筋は、使節団が訪れる数々の都市で網目のように交差していた。マンチェスターでヘンリー五世を演じたチャールズ・カルバートとの出会いのように、時を越えて、明治維新の年に世を去ったチャールズ・キーンと間接的に交差している例さえある。欧米のメディアからは使節団側のリアクションをほとんど知らないのが残念だが、これらの資料を手がかりに、岩倉使節団のアメリカ、イギリスにおける観劇体験の、明治演劇への具体的な影響の可能性について考察して行きたい。

(三)

〈付記〉

本稿を書く過程で、三原文氏に多くのご教示を賜りましたことに感謝申し上げます。

注

- (1) 大笹吉雄『日本現代演劇史』白水社、一九八五年、三〇頁。
- (2) 市川清流(遷)『尾蟻欧行漫録』『遣外使節日記纂輯・二』東京大学出版会、一九七一年。
- (3) 松本伸子『明治前期演劇論史』演劇出版社、一九七四年。
- (4) 三原文『第一回遣米使節とアメリカの舞台』『英語青年』第一四六巻第五号、二〇〇〇年、二八六―二八七頁。
- (5) 久米邦武『特命全權大使米欧回覧実記』講談社、一九七七年。
- (6) 木戸孝允『木戸孝允日記』第二巻、日本史籍協会、一九三三年。
- (7) 久米邦武『久米博士九十年回顧録・上』早稲田大学出版会、一九三九年、三二二頁。
- (8) 田中彰『岩倉使節団「米欧回覧実記」』岩波書店、二〇〇二年、二頁。
- (9) チャールズ・A・ロングフェロー『ロングフェロー日本滞在記』山田久美子訳 平凡社、二〇〇四年、五八―五九頁。
- Kume Kunitake, *The Iwakura Embassy, 1871-1873* Comp. Kume Kunitake. Ed. Graham Healey and Chushichi Tsuzuki. 5 vols. Japan Documents, 2002. Vol. XXIX. 247W・S・ライ
ス (W・S・Rice) とあそ。
- (10) 宮永孝『アメリカの岩倉使節団』筑摩書房、一九九二年、一二七頁。
- (11) 久米邦武『特命全權大使米欧回覧実記』第一巻、八三頁。
- (12) 久米邦武『特命全權大使米欧回覧実記』第一巻、八一頁。
- (13) "Amusements, etc." *Daily Alta California* [San Francisco] 17

- Jan. 1872.
- (14) Culliton, Joseph. "John McCullough" *The Life & Times of Joseph Haworth*, 2000. The Life & Times of Joseph Haworth. 29 Sept. 2009 <http://www.josephhaworth.com/john_mccullough.htm>
- (15) シュニー・D・ブラウン (Sidney D. Brown) 「アメリカ西部の岩倉使節団」『米欧回覧実記』の学際的研究』北海道大学図書刊行会『一九九三年』九三頁。
- (16) Kume, Kunikida. *The Iwakura Embassy, 1871-1873* Vol.1, 78.
- (17) "Amusements." *San Francisco Chronicle* 16 Jan. 1872: "Amusements, etc." *Daily Alta California* [San Francisco] 16 Jan. 1872.
- (18) *San Francisco Chronicle* 18 Jan. 1872.
- (19) *San Francisco Chronicle* 19 Jan. 1872.
- (20) 木戸孝允「前掲書」二一九頁。なお木戸は日付変更線より日記の日付を変えなかったため、この記事の日記の日付は一二月二〇日である。
- (21) フロタター氏のインタビューは本稿である。
- (22) "Local Matters" *Sacramento Bee* 31 Jan. 1872.
- (23) "Local Matters." *Sacramento Bee* 4 Feb. 1872.
- (24) Fitzball, Edward. *The Bronze Horse, or, The Spell of the Cloud King: An Operatic Spectacle in Two Acts*. [microform] Edition: Duncombe's ed. London: J. Duncombe, c1830.
- (25) Medina, L. H. *The Last Days of Pompeii: A Dramatic Spectacle*. [microform] New York: French, c1850.
- (26) Hartnoll, Phyllis. *A Concise History of the Theatre*. London: Thames and Hudson, 1968, 199.
- (27) Hoyt, Harlowe Randall. *Town Hall Tonight*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice, 1955.
- (28) Witham, Barry, ed. *Theatre in the United States: A Documentary History*. Vol.1. Cambridge: Cambridge UP, 1996. 148.
- (29) "The Japanese Levee" *Salt Lake Daily Herald* 7 Feb. 1872.
- (30) Brown, T. Allston. "The Great Sensation Piece of the Day. 'Neck and Neck.' " *Clipper* [New York] 25 Mar. 1871. 3.
- (31) "Theatre." *The Salt Lake Daily Herald* 7 Feb. 1872.
- (32) "The Japanese Levee." *Salt Lake Daily Herald* 7 Feb. 1872.
- (33) 久米邦武『特命全權大使米欧回覧実記』第一巻「四四頁」。
- (34) 同「四六頁」。
- (35) Sheridan, Richard Brinsley. *Pizarro*. Whitefish: Kessinger Publishing, 2004.
- (36) Bogard, Travis, Richard Moody, and Walter J. Meserve, eds. *American Drama*. London: Methuen, 1977. Vol.8 of *The Renels History of Drama in English*. 8 vols. 1976-1983, 188.
- (37) "Amusements." *Salt Lake Daily Herald* 10 Feb. 1872.
- (38) Hartnoll, Phyllis. *A Concise History of the Theatre*. London: Thames and Hudson, 1968, 199.
- (39) 楽団長および新 National Theatre の楽団員の名である。
- (40) Bordman, Gerald Martin. *The Concise Oxford Companion to American Theatre*. New York: Oxford UP, 1987, 499.

- (41) Balfe, M. W. *The Bohemian Girl*. The Decca Record Company Limited. 1991.
- (42) "Amusements." *Daily Morning Chronicle* [Washington] 7 Mar. 1872.
- (43) 久米邦武『特命全權大使米欧回覽実記』第一卷「一〇九頁」。
- (44) "The Opera." *Evening Star* [Washington] 6 Mar. 1872.
- (45) Bordman, Gerald Martin. *American Musical Theatre: A Chronicle*. 3rd ed. Oxford: Oxford UP, 2001.15. Dizikes, John. *Opera in America: A Cultural History*. New Haven: Yale UP, 1993. 95.
- (46) Dizikes, John. *Opera in America: A Cultural History*. New Haven: Yale UP, 1993.114.
- (47) Thomas, Ambrose. *Mignon* CBS Masterworks. 1978.
- (48) LaRue, C. Steven, ed. *International Dictionary of Opera*. Vol.1. Detroit: St. James, 1993. 2 vols. 936.
- (49) "The Opera." *Evening Star* [Washington] 28 Mar. 1872.
- (50) LaRue, C. Steven, ed. *International Dictionary of Opera*. Vol.1. Detroit: St. James, 1993. 2 vols. 873.
- (51) 木戸孝允「前掲書」一五〇～一五一頁。
- (52) "The Opera." *Evening Star* [Washington] 28 Mar. 1872.
- (53) 久米邦武『特命全權大使米欧回覽実記』第三卷「六六頁」。
- (54) 同上「三三四頁」。
- (55) 竹本裕一「久米邦武と能楽復興」『幕末明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社「一九九五年」。
- (56) 久米邦武『特命全權大使米欧回覽実記』第一卷「一二七頁」。
- (57) 木戸孝允「前掲書」一五五頁。キローのペンタグラウンドは不明である。
- (58) "Amusements." *Evening Star* [Washington] 2 Apr. 1872.
- (59) Hoh, LaVahn. "Circus: Adam Forepaugh Circus, 1867 - 1894" *The Circus in America*. 1793 - 1940.
2004. University of Virginia. 6th November 2009
<http://www.circusinamerica.org/public/corporate_bodies/public_show/4/>
- (60) "Amusements." *Evening Star* [Washington] 2 Apr. 1872.
- (61) 木戸孝允「前掲書」一六八頁。
- (62) "Amusements." *Evening Star* [Washington] 29 Apr. 1872.
- (63) 久米邦武『特命全權大使米欧回覽実記』第一卷「一二四九頁」。
- (64) 木戸孝允「前掲書」一七三頁。
- (65) Barras, Charles M. "The Black Crook: An Original and Spectacular Drama in Four Acts." *Nineteenth Century American Plays*. Ed. Myron Matlaw. New York: Applause Theatre, 1967. 317 - 374.
- (66) Bordman, Gerald Martin. *The Concise Oxford Companion to American Theatre*. New York: Oxford UP, 1987.82.
- (67) 外務省編『日本外交文書』第五卷「日本国際連合協会」一九四九年「一一一頁」。
- (68) "Iwakura's Presents to Miss Santley." *Daily Morning Chronicle* [Washington] 24 May 1872.
- (69) 木戸孝允「前掲書」一八三頁。
- (70) 三原文「日本人登場」松柏社「二〇〇八年」宮永孝『海を渡り

た幕末の曲芸団』中央公論新社、一九九九年。

- (71) 外務省編、前掲書、五六頁。倉田喜弘『海外公演事始』東京書籍株式会社、一九九四年、一二頁、九四頁。
- (72) "Amusements." *Daily Morning Chronicle* [Washington] 5 Jun. 1872.
- (73) "Amusements." *Daily Morning Chronicle* [Washington] 4 Jun. 1872.
- (74) "Amusements." *Daily Morning Chronicle* [Washington] 5 Jun. 1872.
- (75) 木戸孝允、前掲書、一八三頁。
- (76) 久米邦武『久米博士九十年回顧録・上』早稲田大学出版会、一九三九年、第一卷、二五一頁。
- (77) Mayo, Marlene J. "The Western Education of Kume Kunitake, 1871-6." *Monumenta Nipponica* 28.1 (1973) : 26-73, 54.
- (78) 児玉実英『アメリカのジャポニズム』中央公論社、一九九五年、一五七頁。
- (79) 三原文氏のご教示によれば、「Bell of Japan」は早川源次郎一座の綱渡り芸人の一人、山本初太郎であった可能性が高い。
- (80) 久米邦武『特命全權大使米欧回覧実記』第一卷、二二六頁。
- (81) 木戸孝允、前掲書、一八五頁。
- (82) 久米邦武『特命全權大使米欧回覧実記』第一卷、二八五頁。
- (83) 中村洪介『岩倉使節団と西洋音楽』『西洋の音、日本の耳』春秋社、一九八七年。奥中康人『国家と音楽』春秋社、二〇〇八年。
- (84) "Amusements." *Boston Daily Globe* 19 Jun. 1872, 1.
- (85) 三原文「フロートウエイの道化師ショー・ミ・フォックス」『アー

ト・タイムス』第四号、デラシネ通信社、二〇〇九年、二四〇-二五頁。

- (86) 松尾正人『木戸孝允』吉川弘文館、二〇〇七年、一四八頁には正次郎とある。
- (87) 木戸孝允、前掲書、二三四頁。
- (88) "Public Amusements." *Liverpool Mercury* 18 Sep. 1872.
- (89) "The Japanese Embassy." *Liverpool Mercury* 2 Oct. 1872.
- (90) 木戸孝允、前掲書、二四二頁。
- (91) 久米邦武『特命全權大使米欧回覧実記』第一卷、一四三頁。
- (92) 木戸孝允、前掲書、二四五頁。
- (93) "Theatre Royal." *Manchester Guardian* 5 Oct. 1872.
- (94) Knowles, James Sheridan. *The Love-Chase*. New York: Samuel French, 1842.
- (95) 木戸孝允、前掲書、二四二頁。
- (96) Kennedy, Dennis ed. *The Oxford Encyclopedia of Theatre and Performance*. Vol. 1. Oxford UP, 2003, 68.
- (97) 久米邦武『久米博士九十年回顧録・上』早稲田大学出版会、一九三九年、三二二頁。
- (98) 久米邦武『特命全權大使米欧回覧実記』第二卷、一八〇頁。
- (99) Glassstone, Victor. *Victorian and Edwardian Theatres: An Architectural and Social Survey*. London: Thames and Hudson, 1975, 32.
- (100) *Ibid.*, 42.
- (101) Foulkes, Richard. *Performing Shakespeare in the Age of Empire*. Cambridge: Cambridge UP, 2002, 86-87.

- (102) *Ibid.*, 96—100.
- (103) Booth, Michael R. *Theatre in the Victorian Age*. Cambridge: Cambridge UP, 1991.50.
- (104) *Ibid.*, 49.
- (105) Darbyshire, Alfred. *The Art of the Victorian Stage: Notes and Recollections 1839—1908*. New York: Blom, 1969. 44—45.
- (106) 由井正臣『後は昔の記——林董回想録』平凡社、一九七〇年、一八九頁。
- (107) 『抜さつ抜かれつ』と、明治十二年の新富座で上演された『漂流奇譚西洋劇』との関連については、拙稿「明治初期の歌舞伎は西洋演劇と出合ったのか？」（『演劇学論叢』第七号、大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室、二〇〇四年）で論じている。